



Japan Pharmaceutical Information Center

# JAPIC NEWS

## ■ 巻頭言

### 現場を理解し、寄り添っていく

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 理事(技監) 宇津 忍 ..... 2

## ■ 最近の話題

重篤副作用疾患別対応マニュアル「リチウム中毒」の新規追加 ..... 4

広島大学大学院 臨床薬物治療学 准教授 猪川 和朗

公共図書館と医療・健康情報サービス(後編)

～埼玉県立久喜図書館の事例から～ ..... 6

駿河台大学 メディア情報学部 助教 青野 正太

## ■ インフォメーション

10月末発売!

JAPIC「医療用・一般用医薬品集インストール版2022年10月版」 ..... 8

## ■ コラム

くすりの散歩道No.149「人間の終焉」

(一財)日本医薬情報センター 大規模安全性情報担当 西山 彩姫 ..... 9

■ 外国政府等の医薬品・医療機器等の安全性に関する規制措置情報より(抜粋) ..... 10

■ 図書館だより No.387 ..... 11

■ 情報提供一覧 ..... 11

# 10

No.461

October 2022

50  
TH  
ANNIVERSARY

JAPIC  
Japan Pharmaceutical Information Center

一般財団法人 日本医薬情報センター

## 現場を理解し、寄り添っていく

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構  
理事 (技監)

宇津 忍 *Uzu Shinobu*



### はじめに

令和の時代に入りましたが、私は平成元年に当時の厚生省に入省して以降、30年以上の多くを医薬品に関連した仕事をしてきました。入省当時、先輩方から医薬品はモノではなく、情報がセットで医薬品だと教わり、JAPICの医薬品集など大変お世話になってきました。現在はPMDAに所属していますので、医薬品情報に関連したいくつかのPMDAに関連した取組みをご紹介します。

### ○小児・妊産婦に対する情報の充実

小児に対する医薬品は、臨床試験実施の難しさ、市場性など様々な理由により、関係者で様々な取組みを進めていますが、なかなか開発が進まないという課題があります。その結果、小児の用法・用量や安全性などの情報は少なくなっています。妊婦についても一般的には成人を対象とした臨床開発では除外されているので、小児と同じように医薬品情報は少なくなっています。

添付文書で、“治療の有益性が危険性を上回ると判断される場合のみに投与すること”とか、“小児等を対象とした臨床試験は実施していない”という記載をよく見かけます。事実、その通りです。その一方で、小児や妊婦に対し薬をどうしても使わなければならない場合はあり、現場の医療関係者が関連情報を収集・評価するなど、様々な努力をされてきています。例えば、国立成育医療研究センターに妊娠と薬情報センターが設けられ、薬に関する情報収集も一つの主要な取組みとなっています。

PMDAでは妊娠と薬情報センターと協力し、

投与された症例の情報も含め、様々な関連情報から、妊婦への薬の使用に関する有用な情報が導き出せないか取組みを進めています。すでに一部の薬剤では、添付文書に関連する情報を盛り込むことができたものもあります。小児についても同様に、国立成育医療研究センターなどの関係する先生方と、情報の充実ができないか相談を進めています。このような取組みにより、小児や妊婦に関する具体的な情報の充実が図られ、医療現場での負担が軽減されることを期待しています。

### ○情報収集と周知に関する患者会との協働

患者さんへの情報提供は、製薬企業、医療関係者を通じて行われます。多忙な多数の関係者が関わることとなりますので、緊急安全性情報など迅速・確実に患者さんに情報を伝える必要がある場合は、特に困難が伴います。また、PMDAでは、ホームページへの掲載、メール配信サービス「メディナビ」での周知も行っています。しかしながら、ホームページでは患者さんがアクセスしなければなりませんし、メディナビもまずは患者さんの登録が必要です。さらに、多くの情報の中から該当する情報を見つけていかなければなりません。副作用に関する情報収集でも、患者さんによっては医療関係者に副作用を相談することを躊躇する場合もあり、結果的に副作用の把握が漏れてしまうこともありえます。このような課題に対しては、PMDAが患者さんと直接、情報をやり取りできれば、対応可能となります。そこで、疾患によっては患者会が組織化され、会員内で情報共有するような活動を行っているところもあり、そのような患者会と協

働することができないか検討し、試行的な取組みとして、日本ライソゾーム病患者家族会協議会と協力することとしました。

患者会の方からは、希少疾病の場合は安全性情報に加え、市販前に得られている有効性の情報も十分ではなく市販後に得られるものもあり、有効性の情報も患者にとって貴重なものだとの意見をいただきました。そこで、市販後の使用上の注意改訂などの安全性情報に加え、新薬の承認時、再審査終了時で、その医薬品の有効性も含めた情報を、患者会などと相談しながら、簡潔かつわかりやすく作成し、患者会でその情報を会員にダイレクトに送っていただくこととしました。また、市販後の副作用などの情報も患者会で把握できたものについては直接PMDAに情報提供いただくこととしました。今年の5月には、“ゼンフォザイム”という新薬について、情報提供を行いました(<https://www.pmda.go.jp/safety/0001.pdf>)。この活動を数年間行い、内容を評価したうえで、可能であれば他の疾患にも拡大していきたいと考えています。

### ○PMDA職員の医療現場の理解促進とよりわかりやすい広報へ

医薬品情報は、医療関係者や患者さんが理解でき、活用できて初めて意義を持つものです。PMDAでは、様々な情報を発出しますが、その情報を受け手の方々がどのように使っているのか、必要な情報はないか、より分かりやすい内容にできないかなど、現場のニーズをPMDAが把握し、発出する医薬品情報に生かしていく必要があります。

そのためにはPMDA職員自身が医療現場での医薬品情報の活用状況を理解することが重要です。PMDAの安全部門の技術系職員は、多くが薬剤師免許を持っていて、大学での実務実習を経験していますが、現場の理解という観点では十分ではありません。そこで、あらためて、医薬品情報を中心とした現場での理解を進めるために、国立国際医療研究センター病院、国立がん研究センター中央病院・東病院、国立成育医療研究センター病院それぞれの薬剤部のご協力を得て、PMDA安全業務を理解した若手を対象に、1年間の研修を開始しました。新しい薬の採用にあたっての有効性、安全性の説明、使用上の注意の改訂時も含めた添付文書情報の院内への周知、副作用報告の処理、医療関係者とのコミュニケーションなどについて、

医療現場での取組み、工夫を学んでもらいます。さらには、先進的な医療を提供している施設でするので、適応外使用、小児など用法用量が設定されていない対象への投与についての状況も理解してもらいたいと思います。これらの経験をPMDAに蓄積し、情報提供に生かしていきたいと思います。

同時に、添付文書などの安全性情報文書だけでなく、PMDAのウェブサイトの内容も含めたわかりやすい情報提供も必要です。PMDAでは外部の有識者の知恵も借りながら、PMDAの情報について、よりわかりやすいウェブサイトとする取組みもスタートしたところです。

### おわりに

医薬品情報に関連するいくつかの取組みを紹介しました。PMDAでは、“より有効で、より安全な医薬品・医療機器をより早く医療現場に届けることにより、患者にとっての希望の懸け橋となるよう努めます”を理念の一つとしています。さらに、2019年11月のJAPIC NEWS 427号の巻頭言で藤原理事長が紹介した4つのFの一つとして、Patient First(臨床現場と良好なコミュニケーションを築き、患者の満足度を最優先に業務を行います)を重点として示しました。

日々進歩、状況が変化していく医薬品の世界にあっては、PMDAも常に進化していかなければなりません。医薬品は情報が伴って初めて医薬品であることを胸に、医薬品情報の充実に向けた取組みを進めてまいります。最後に、医薬品情報に関する様々な取組みをなさっているJAPICのさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

## 最近の話題

重篤副作用疾患別対応マニュアル  
「リチウム中毒」の新規追加

広島大学大学院臨床薬物治療学  
准教授 猪川 和朗 *Ikawa Kazuro*

## はじめに

重篤副作用疾患別対応マニュアルは、関係学会マニュアル作成委員会と日本病院薬剤師会で作成・議論した原案を、厚生労働省重篤副作用総合対策検討会が検討し取りまとめた。2006年11月より順次公表されてきたが、2022年2月には17マニュアルが改定され、「リチウム中毒」、「薬剤性せん妄」、「ベンゾジアゼピン受容体作動薬の治療薬依存」、「免疫チェックポイント阻害薬による免疫関連有害事象対策マニュアル」の4つが新規追加された（現在あわせて78マニュアル）。そのうち本稿では「リチウム中毒(lithium toxicity)」<sup>1)</sup>について概説する。

## 早期発見と早期対応のポイント

## (1) 症状の発現時期

リチウム中毒は「急性中毒」と「慢性中毒」に大別される。急性中毒の多くは、炭酸リチウム投与継続中に急性中毒を来してしまった「急性・慢性中毒」である。急性中毒の発現時期は、炭酸リチウム服用患者が自傷行為や自殺企図で過量服用した時、誤って多量服用した時、嘔吐、下痢、発熱などによる脱水時である。一方、慢性中毒の発現時期は、炭酸リチウムの増量時、腎機能障害時、非ステロイド性消炎鎮痛薬(NSAIDs)、利尿薬、アンジオテンシン変換酵素(ACE)阻害薬、アンジオテンシンII受容体拮抗薬(ARB)、メロニダゾールなどを併用した時である。

## (2) 疑う症状

急性中毒、急性・慢性中毒では、初期に無症状のこともあるが、嘔気、下痢、食欲不振、口渇、腹痛などの消化器症状を認める。リチウム中毒では急性、慢性を問わず共通して、振戦、めまい、眼振、筋脱力、不明瞭言語、脱水、低Na血症を認める。

## (3) 血中リチウム濃度

リチウムは治療濃度域と中毒濃度域が近接しているため、血中濃度の適正な管理が不可欠である。添付文書はもちろん、医薬品医療機器総合機構からは2012年以降、投与初期または用量を増量した時には、維持量の決定まで1週間に1回をめ

どに血中濃度測定をすること、また維持量の投与中は2~3か月に1回をめぐりに血中濃度を測定することが注意喚起されている<sup>2)</sup>。治療域の血中濃度は0.6~1.2 mEq/Lで、1.5mEq/Lを超えるとリチウム中毒を起こす可能性が高まる。重症度別では、軽度または中等度(1.5~2.5 mEq/L)、重度(2.5~3.5 mEq/L)、生命に危険を及ぼす中毒(>3.5 mEq/L)と分類されている。

## 副作用の概要

## (1) 副作用発生頻度

日本中毒情報センターへのリチウム中毒に関する報告は、2019年で19件であった。これは非常に少ない発生頻度のようにあるが、報告された件数のみであることを念頭に置く必要がある。

## (2) 併用に注意を要する医薬品

特に併用に注意する薬は表1に示すとおりで、血中リチウム濃度を上昇させる身体的因子としては、高齢者、妊婦、脱水、尿崩症、低アルブミン血症などが挙げられる。

## (3) 発症危険因子

リチウム中毒を発症させる危険因子として、上記の併用薬に加え、血液循環量の減少(暑熱、サウナ)、水分の経口摂取量の減少・患者のナトリウムと水分状態の変化、手術、感染症(ウイルス感染症、下痢や嘔吐を伴う胃腸炎)、発熱、腎不全、腎性尿崩症、自殺未遂、炭酸リチウム1日投与量の変化、慢性的な炭酸リチウム過剰投与が挙げられる。

## (4) 臨床症状

急性中毒、急性・慢性では、消化器症状を頻繁に認める。また、粗大な振戦や循環器症状を呈する。呼吸促拍症候群、体温調節障害、心血管症状の可能性もある。遅れた中枢神経症状として、振戦や構音障害、運動失調、眼振など小脳関連の錯乱状態が見られる。不可逆的なリチウム関連神経毒性症候群は、炭酸リチウム投与中止後も2か月以上後遺症が持続する。一方、慢性中毒では、急性中毒に比べ中枢神経症状の頻度が高い。

### (5) 発症機序と病態

リチウムはイオンであり、蛋白結合せずに血中に存在する。分布は自由水と同様の体内分布を示し、腎から排泄されて60%以上が近位尿細管で再吸収される。炭酸リチウムの慢性摂取は、抗利尿ホルモンへの抵抗性につながり、患者の20~40%で多尿や多飲を引き起こす。この機序に関して、リチウムはナトリウムと同様に処理されて、管腔膜の上皮Naチャネルを通り集合管の主要細胞に入る。続いて、これらの細胞に蓄積し、抗利尿ホルモンの透水性を高める能力を妨害すると考えられている。

### 臨床検査所見と判別方法

臨床検査所見においては血中リチウム濃度が不可欠で、トラフ値(通常、最終投与後12時間後)を測定する。加えて定期的に甲状腺機能、副甲状腺機能、腎機能を評価する。急性中毒または急性・慢性中毒では、炭酸リチウムの過剰摂取や体液喪失などの病歴聴取が重要となる。血中リチウム濃度は、臨床徴候および予後との関連性が強い指標であるため、測定トラフ値を患者の重症度や治療選択の判断に用いる。ただし、リチウム濃度が中毒域に達していなくても中毒症状を呈することがあるため注意する。リチウムの心毒性作用は、心電図で確認する。

### 判別が必要な疾患と判別方法

セロトニン症候群の症状は、錯乱、軽躁、焦燥、ミオクローヌス、腱反射亢進、発汗、悪寒、振戦、下痢、運動失調、発熱などで、リチウム中毒の症状と共通するため、炭酸リチウム服用歴や血中リチウム濃度などから鑑別する。悪性症候群については、特徴的な高熱や筋強剛、血中クレアチンキナーゼの上昇などから鑑別する。他の薬物の過剰摂取は、測定キットを用いた薬物尿検査などから鑑別する。また、てんかん、低血糖、急性

脳血管障害、低Na血症などの意識障害に関しては、血液検査、頭部CT/MRI、脳波などから鑑別する。

### 治療方法

治療の基本は点滴輸液を含む対症療法となるが、急性中毒か慢性中毒かで治療の内容が若干異なる。リチウム除去に関して、活性炭はリチウムを吸着しないため、活性炭で吸着可能な他の薬物を服用していない限り、活性炭は治療で用いない。利尿薬はナトリウムの排泄促進により、腎におけるリチウムの再吸収を代償的に促進するため、利尿薬は用いない。リチウムは分子量が小さく、蛋白結合せず、分布容積も小さいため、血液浄化療法で除去されやすく、透析が効果的である。循環動態が不安定な場合には、持続的血液濾過透析なども効果的である。リチウムに対する拮抗薬はない。

### おわりに

以上のようなリチウム中毒に関し、患者自身または家族に対しては、副作用の黄色信号となる「手が震える」、「意識がぼんやりする」、「眠くなる」、「めまいがする」、「言葉が出にくくなる」、「吐き気がする」、「下痢をする」、「食欲がなくなる」、「口が渇く」、「お腹が痛くなる」の初期症状をよく説明すること、気づいた場合には自己判断で中止・放置せず医師・薬剤師へ連絡するように周知徹底することが重要である。

### 文献

- 厚生労働省。重篤副作用疾患別対応マニュアル「リチウム中毒」。2022年2月。<https://www.mhlw.go.jp/topics/2006/11/dl/tp1122-1j31.pdf>
- 医薬品医療機器総合機構。炭酸リチウム投与中の血中濃度測定遵守について。PMDAからの医薬品適正使用のお願い(No. 7)2012年9月。<https://www.pmda.go.jp/files/000145551.pdf>

【表1】血中リチウム濃度上昇の危険因子

分類	因子	機序など
薬剤性	NSAIDs	プロスタグランジンの合成抑制により、腎の水分および電解質の代謝に影響し、血中リチウム濃度を上昇させる。
	ACE阻害薬・ARB	アルドステロン分泌を抑制し、ナトリウムの排泄促進により、腎におけるリチウムの再吸収を代償的に促進する。
	利尿薬	ナトリウムの排泄促進により、腎におけるリチウムの再吸収を代償的に促進する。
	メトロニダゾール	機序不明
身体的	高齢者	腎機能低下により血中リチウム濃度が上昇することがある。
	妊婦	分娩直前に血中リチウム濃度が異常上昇を起こすことがある。
	脱水	嘔吐、下痢、発熱、熱中症、過度の運動などにより、体外への喪失により循環血漿量が減少し、血中リチウム濃度が上昇することがある。
	尿崩症	リチウム中毒自体でも生じ、血管外への喪失により循環血漿量が減少し、血中リチウム濃度が上昇することがある。
	低アルブミン血症	血管外への喪失により循環血漿量が減少し、血中リチウム濃度が上昇することがある。

## 最近の話題

# 公共図書館と医療・健康情報サービス (後編)

～埼玉県立久喜図書館の事例から～



駿河台大学 メディア情報学部  
助教 青野 正太 Aono Shota

### 1.はじめに

本稿では前編<sup>1)</sup>に続き、公共図書館や図書館におけるサービスを研究している筆者の立場から、医療・健康情報を市民に提供する機関としての公共図書館について解説する。後編では図書館の取組事例や、サービスの持つ意義などについて解説する。公共図書館の取組の中でも今回は、先進事例として事例研究等でも多く取り上げられている埼玉県立久喜図書館(以下、久喜図書館とする)の取組を紹介する。

久喜図書館の取組については埼玉県立図書館HP<sup>2)</sup>や、図書館職員である小西美穂<sup>3)</sup>、石関莉奈<sup>4)</sup>によるものを参考しているが、本稿はあくまで図書館外の人間である筆者個人の整理であることをご留意いただきたい。

### 2.久喜図書館のサービス内容

#### 2.1 コーナーの設置

医療・健康情報を調べるのに役立つと思われる情報をまとめたコーナーを設置している(図1)。コーナーでは、図書館が普段から収集している図書・雑誌に加え、パンフレットを収集し、まとめて提供している。さらに、著名な医学雑誌記事索引である「医中誌Web」をはじめとしたオンラインデータベースについても、図書館で契約しているものを無料で利用することができる。



図1 健康・医療情報コーナー

(出所:埼玉県立図書館ホームページ「健康・医療情報コーナーのご案内・本の探し方」<sup>5)</sup>)

公共図書館が提供する医療・健康情報は、一般向けのものから比較的専門的なものまで対象としている。久喜図書館の場合、『よくわかる最新医学』シリーズ(主婦の友社)のような平易なものから、『標準〇〇学』シリーズや『今日の治療指針』(いずれも医学書院)のような医学生・医師向けの資料も所蔵している。また、診療ガイドラインについても所蔵している。

「医中誌Web」については、久喜図書館では収録されている雑誌を所蔵していないケースもあるものの、埼玉県立大学図書館、埼玉医科大学附属図書館で所蔵している場合、県立図書館が仲介して久喜図書館の利用者に複写物を提供できるようにしている。

#### 2.2 調べ案内やリンク集の提供

図書館で利用できる情報やインターネット上の情報を効果的に利用できるようにするため、久喜図書館では医療・健康情報に関する調べ方をまとめた冊子『健康・医療情報リサーチガイド@埼玉』を作成し、図書館で配布するとともに、HP上で閲覧できるようにしている(図2)。3年に1回程度のペースで定期的に改訂されており、2021年に最新の改訂2版を発行している。A5版40ページにわたる充実した調べ案内である。



図2 健康・医療情報リサーチガイド

(出所:埼玉県立図書館ホームページ「健康・医療情報リサーチガイド@埼玉 改訂2版」<sup>6)</sup>)

さらに、図書館HPではリンク集として、埼玉県の保健医療部各課の相談窓口や、埼玉県難病相談支援センターといった県内の「医療相談窓口」などの情報を集約し、提供している。加えて、昨今ニーズがあると考えられるCOVID-19については、専用のリンク集を作成するとともに、「新型コロナウイルス「正しく恐れる」ために」と題し、情報の見極め方など、ヘルスリテラシーを学ぶのに有用な情報源を紹介している<sup>7)</sup>。

### 2.3 情報の探し方講座の実施

情報の探索方法を市民に実際に伝えるため、「情報の探しかた講座」を実施している。「カラダと病気の情報を探そう」などのテーマで実施しており、講座に参加できない市民も活用できるように、テキストの一部をHPで公開している<sup>8)</sup>。

### 2.4 レファレンスサービスの実施

自力で調べるのが難しい市民や、調べるための時間が取れない市民のため、図書館ではレファレンスサービスを実施している。レファレンスサービスは「図書館が行なう利用者サービスの一つで、必要とする文献や参考図書についての問い合わせに応じたり、検索に協力したりするもの」（『日本国語大辞典』）である<sup>9)</sup>。

実際に久喜図書館が対応した問い合わせ事例として、図書館HPには「SARSコロナウイルス、または飛沫感染症についての資料を見たい」、「埼玉県の病院の眼科の治療実績等を知りたい」といった事例が挙げられている。図書館のカウンターだけでなく、HPや電話などにより、来館しなくても図書館司書に問い合わせをすることができる。

### 2.5 相談会・講演会等の開催

埼玉県の保健医療に関する施設や、県内の医療機関・関係機関等と連携して、医療専門職や関係機関の職員などを講師に招いての相談会・講演会を実施している。直近では、今年の9月30日に「図書館で、よろずがん相談-治療-生活-心をサポート-」と題して、埼玉県立がんセンター患者サポートセンターのがん専門相談員を招いての相談会を開催している。

## 3. 公共図書館・図書館司書の存在

田村は医療・健康情報サービスを公共図書館で行う利点として、住民にとって日常的に利用する身近な存在であること、行政が提供することから安心である点を挙げている<sup>10)</sup>。さらに、小西は久喜図書館のサービス実践を踏まえ、医療・健康情報を提供する機関としての公共図書館の強みを次の3点挙げている。(1) 図書館ネットワークを利用して、あらゆる立場・レベル種類の資料・情報を提供できる、(2) 情報探しの支援ができる、(3) 地域の機関や団体と住民をつなぐ場になれる<sup>3)</sup>。

小西が挙げているこれらの強みは、情報専門職である図書館司書の存在によるものと考えられる。コーナーの整備、リンク集の提供といった方法により有用な情報を選択、提供すると

もに、調べ案内の提供やレファレンスサービスによって市民が医療・健康情報を適切に探す支援をしていると考えられる。さらに、医療機関・関係機関等と連携した相談会や講演会は、専門家の知識やノウハウを市民に届けることや、これらの機関と市民とのつながりをつくることにつながっていると考えられる。

この情報社会において、身近で安心感のある公共図書館という場で、図書館司書が情報と市民とをつなげることができるのが、公共図書館で医療・健康情報を提供することの意義であると言えるのではないだろうか。

## 4. おわりに

2回にわたり、公共図書館の医療・健康情報サービスについて解説する機会をいただいた。こうした医療・健康情報を公共図書館が安定して提供することができるのは、ひとえに医療機関や関係機関、またそこで働く医療専門職の皆様が日々信頼性の高い情報を生み出していることによるものである。COVID-19のご対応も含め日々ご尽力くださっていることに、改めて感謝を申し上げたい。

公共図書館には、情報拠点として日々生み出されている信頼性の高い情報を市民に伝えるハブとしての役割を期待したい。また、筆者もいち図書館関係者として、公共図書館がこうした役割を一層果たせるよう尽力していきたい。

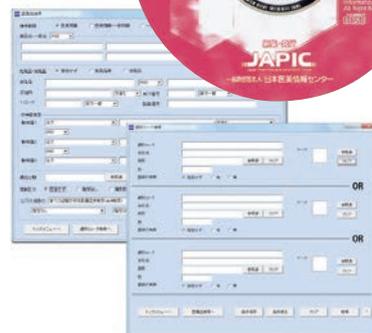
## 参考文献

- 1) 前編については2022年9月号を参照されたい。  
青野正太. 公共図書館と医療・健康情報サービス(前編): 医療・健康情報の入手・利用を支援する. JAPIC NEWS. 2022, no. 460, p. 4-5. [https://www.japic.or.jp/service/whats\\_new/japicnews/pdf/JAPICNEWS22-09.pdf](https://www.japic.or.jp/service/whats_new/japicnews/pdf/JAPICNEWS22-09.pdf), (accessed 2022-09-05).
- 2) “健康・医療情報サービス”. 埼玉県立図書館. <https://www.lib.pref.saitama.jp/guide/health/index.html>, (accessed 2022-09-05).
- 3) 小西美穂. 公共図書館だからこそできる健康・医療情報サービス. 図書館雑誌. 2021, vol. 115, no. 7, p. 414-417.
- 4) 石関莉奈. 埼玉県立久喜図書館における健康・医療情報サービスについて. 薬学図書館. 2021, vol. 66, no. 2, p. 73-81.
- 5) “健康・医療情報コーナーのご案内-本の探し方”. 埼玉県立図書館. <https://www.lib.pref.saitama.jp/guide/health/service/health-index.html#annai>, (accessed 2022-09-05).
- 6) “『健康・医療情報リサーチガイド@埼玉 改訂2版』”. 埼玉県立図書館. <https://www.lib.pref.saitama.jp/guide/health/service/post-36.html>, (accessed 2022-09-05).
- 7) “新型コロナウイルス「正しく恐れる」ために”. 埼玉県立図書館. <https://www.lib.pref.saitama.jp/guide/health/post-30.html>, (accessed 2022-09-05).
- 8) “情報の探しかた講座テキスト”. 埼玉県立図書館. <https://www.lib.pref.saitama.jp/reference/programs/post-17.html>, (accessed 2022-09-05).
- 9) “レファレンスサービス”. 日本国語大辞典 第二版 第13巻. 小学館, 2002, p. 1085.
- 10) 田村俊作. “医療情報サービスの現状と可能性”. 公共図書館員のための医療情報サービス研修会in大阪. 豊中, 2015-01-29. 日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「アクション・リサーチによる公共図書館課題解決のデザイン」研究班. <http://user.keio.ac.jp/~tamaran/research/med/toyonaka1.pdf>, (accessed 2022-09-05).

10月末発売!

## JAPIC「医療用・一般用医薬品集インストール版2022年10月版」

- ◇医療用および一般用医薬品の添付文書情報を収録したWindows対応CD-ROM。  
(医療用は2022年10月、一般用は2022年9月までのJAPIC入手分を収録)
- ◇製品情報、医薬品集本文データの検索・表示・印刷・データ出力が可能。  
データ出力形式は、タブ区切り/カンマ区切りテキスト(csv)から選択できます。
- ◇薬価、先発品等/後発品情報、規制区分、剤形、添加物、  
薬剤識別コード情報なども収録し、さまざまな角度から検索できます。
- ◇完全インストール仕様により、スピーディな検索・結果表示を実現。  
インターネット環境のない薬剤モニタリング業務などにも最適です。
- ◇インターネット経由で、最新の添付文書PDFの表示も可能です。  
(医療用:週1回更新、一般用:月1回更新)



- ◆価格: 単回 14,300円(税込)  
年間セット4枚(10月・1月・4月・7月) 26,186円(税込)  
[お問合せ先] 事務局 渉外担当 (TEL:0120-181-276, FAX:0120-181-461)

## 「JAPIC NEWS」はホームページからも閲覧出来ます!

本誌『JAPIC NEWS』は、電子媒体(PDFファイル)として、  
2004年4月号から最新号までを下記ホームページ上で公開しております。

### JAPIC NEWS PDF版 掲載サイト

[https://www.japic.or.jp/service/whats\\_new/japicnews/index.php](https://www.japic.or.jp/service/whats_new/japicnews/index.php)  
(下のQRコードからもアクセス可能です)



トップページからはページ下部の  
こちらのバナーよりアクセス出来ます!

機関誌  
「JAPIC NEWS」  
はこちらから



# くすりの散歩道

no.149



## 人間の終焉

(一財)日本医薬情報センター 大規模安全性情報担当

西山 彩姫 Nishiyama Saki

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が流行している今日、パンデミック以外の暗い話題も多く、世の中に息苦しさを感ずき、また先の見えない将来に不安を覚えている人は私だけではないと思う。

そこで、あえて昔の本や映画などに触れ、思考することで、良い意味での現実逃避が叶ったり、何かしらの気づきを得られることがあるかもしれない。

今回は私が学生時代に耽読していた本を紹介する。

渡辺格『人間の終焉—分子生物学者のことあげ』  
(渡辺格、朝日出版社、1976年)

朝日出版社から1975年～1979年に発刊されていた雑誌『エピステーメー』で7回にわたり連載されていたものが本書にまとめられている。

日本の分子生物学者である渡辺格氏が、生命科学をめぐる哲学的・思想的な主張を述べ、人類の存続に関する問題を提起している。

中でも、科学者ではない我々が密接に関わっている人類の存続に関する問題を中心に紹介したいと思う。

自然科学と技術の発展に伴って、人口が急激に増加したことで、食糧問題、エネルギーなどの資源枯渇、空間の問題などが深刻化すると予想されている。また、人類と個人の生存を危うくしている問題として、核戦争の危機、環境汚染を挙げている。

各問題に共通する一つの重大な事実は、地球は無限のものではなく、有限の狭い閉鎖世界であったためにこれらの危険が生じたということである。このため、人口を制限し、生活レベルを切り下げる必要が生じてきたが、そこで人工的な淘汰が大きな問題になると述べられている。

これらを抱えた人類が行き着く先として、『恥多き生存』と『尊厳な人類の終焉』という二つの道を示している。

この人類の存続に関する問題の根底にあるものが生命科学である。

分子生物学は、第一期として生命現象と物質現象との間の溝を埋めることに成功し、第二期に「分子から人間へ」「分子から精神へ」と向かい、人文や社

会科学、哲学・思想などの人間存在に関する問題との関係が再検討されるはずであると渡辺氏は主張している。

分子生物学を含む生命科学が発展し、人間の生命現象の解明が進んでいる。人間は遺伝情報によって決定されるということが発見された。こうした生命科学の発展が医療の進歩をもたらし、人間の寿命は延伸し、先天的疾患を抱えた人々もそうでない人々と同様に生き永らえることが可能となった。

しかし、こうした明るい影響のみを残すことはなく、例えば遺伝子の研究が進むことによる遺伝子診断による人工的淘汰など、人間存在に関する間違った新しい問題を、生命科学の研究の発展がもたらした。

以上のような問題に、46年前に渡辺氏は警笛を鳴らしていた。

46年前と現在では自然科学や社会、環境、その他たくさんのもので変化しているが、この人類の存続に関する問題は不変なのではないかと思う。既に『恥多き生存』と『尊厳な人類の終焉』いずれか一方の道へ進んでいるかもしれないし、第三の道が拓かれているのかもしれない。また、COVID-19の流行によって、数年の間で大きな変化が地球規模でもたらされた。このことから新たな人類の存続に関する問題も生まれているかもしれない。

また、生命科学の黎明に立ち会った一般の人々は、希望だけではなく、自分自身が暴かれることに対する不安を抱いていたことが本書から伝わってくる。学術書からは決して伝わってこない貴重な情報である。

私は、本書を読むまでは、生命科学を当たり前のように真理として学び、自分自身の生命現象が分子レベルで説明されていることに一切の疑問を抱いたことがなく、それは第二期の分子生物学の「分子から人間へ」「分子から精神へ」という渡辺氏の期待とは異なるものであった。しかし、本書を読んでから、生命科学のみならず種々の分野において他の領域と結び付けて思考することの重要さに気づくことができた。

# 外国政府等の医薬品・医療機器等の 安全性に関する規制措置情報より－(抜粋)

2022年8月1日～8月31日分のJAPIC WEEKLY NEWS (No.864-857) の記事から抜粋

## ■米FDA

- Class I Recall : Covidien, LLC (Medtronic) , カテーテルハブの欠陥により, PalindromeおよびMahurkar血液透析カテーテルをリコール  
<<https://www.fda.gov/medical-devices/medical-device-recalls/covidien-llc-medtronic-recalls-palindrome-and-mahurkar-hemodialysis-catheters-due-catheter-hub>>
- Baxter Healthcare Corporation, 医薬品ラベルの誤記のリスクによりAbacus Order Entry and Calculation Softwareをリコール  
<<https://www.fda.gov/medical-devices/medical-device-recalls/baxter-healthcare-corporation-recalls-abacus-order-entry-and-calculation-software-risk-medication>>
- Class I Recall : North American Diagnostics, 米FDAの承認, 許可, 認可を得ていないOral Rapid SARS-CoV-2 Rapid Antigen Test Kitをリコール  
<<https://www.fda.gov/medical-devices/medical-device-recalls/north-american-diagnostics-recalls-oral-rapid-sars-cov-2-rapid-antigen-test-kits-are-not-authorized>>
- Class I Recall : Haimen Shengbang Laboratory Equipment Co. Ltd., 米FDAの承認, 許可, 認可を受けていないViral Transport Media Containersをリコール  
<<https://www.fda.gov/medical-devices/medical-device-recalls/haimen-shengbang-laboratory-equipment-co-ltd-recalls-viral-transport-media-containers-are-not>>
- Class I Recall : Becton Dickinson, 治療送達の遅延を引き起こすおそれのある問題のためIntraosseous Needle Set Kits, Intraosseous Manual Driver KitsおよびIntraosseous Powered Driversをリコール  
<<https://www.fda.gov/medical-devices/medical-device-recalls/becton-dickinson-recalls-intraosseous-needle-set-kits-intraosseous-manual-driver-kits-and>>
- Drug Alert : 米FDA, glatiramer acetate注射剤で使用するためのオプションである自己注射器との相互互換性の問題について, 患者, 介護者, および医療提供者に対し警告  
<<https://www.fda.gov/drugs/drug-safety-and-availability/fda-alerts-patients-caregivers-and-health-care-providers-cross-compatibility-issues-autoinjector>>

## ■カナダHealth Canada

- Summary Safety Review - Nexavar (sorafenib) -血栓性微小血管症の潜在的なリスクの評価  
<<https://hpr-rps.hres.ca/reg-content/summary-safety-review-detail.php?lang=en&linkID=SSR00286>>

## ■EU・EMA

- Direct healthcare professional communication (DHPC) : Rubraca (rucaparib) : 適応症の制限  
<[https://www.ema.europa.eu/en/documents/dhpc/direct-healthcare-professional-communication-dhpc-rubraca-rucaparib-restriction-indication\\_en.pdf](https://www.ema.europa.eu/en/documents/dhpc/direct-healthcare-professional-communication-dhpc-rubraca-rucaparib-restriction-indication_en.pdf)>

## ■英MHRA

- National Patient Safety Alert : Philips Health SystemsのV60, V60 Plus, V680人工呼吸器 : 予期せぬシャットダウンが生じ, 換気が完全に喪失する可能性がある (NatPSA/2022/002/MHRA) (更新情報)  
<[https://assets.publishing.service.gov.uk/media/6242d92ee90e075f13a3a5d8/NaPSA-Ventilators-UPDATED\\_25.05.22.pdf](https://assets.publishing.service.gov.uk/media/6242d92ee90e075f13a3a5d8/NaPSA-Ventilators-UPDATED_25.05.22.pdf)>
- National Patient Safety Alert : Class 1 Medicines Recall Notification : Clinigen Healthcare LtdのMexiletine hydrochloride 50mg, 100mgおよび200 mg硬カプセル, 過少量投与および/または過量投与の可能性によりリコール (NatPSA/2022/007/MHRA)  
<<https://assets.publishing.service.gov.uk/media/62e96fb6e90e07143d51936d/NatPSA-2022-007.pdf>>

## ■医薬品医療機器総合機構

- 医療機器の回収に関する情報 (2022年度・クラスI) (販売名:アシュリティMRI, ゼネックス MRI)  
<<https://www.info.pmda.go.jp/rgo/MainServlet?recallno=1-1539>>

JAPIC事業部門 医薬文献情報 (海外) 担当

記事詳細およびその他の記事については、JAPIC Daily Mail (有料) もしくはJAPIC WEEKLY NEWS (無料) のサービスをご利用ください (JAPICホームページのサービス紹介: <<https://www.japic.or.jp/service/>> 参照)。JAPIC WEEKLY NEWSサービス提供をご希望の医療機関・大学の方は、事務局 渉外担当 (TEL 0120-181-276) までご連絡ください。

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。

この情報は附属図書館の蔵書検索 (<https://tech.libblabo.jp:53081/blabo/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧いただけます。

これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。

閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越しください。

〈配列は洋書、和書別に書名のアルファベット順、五十音順〉

書名	著者	出版者	出版年月
European Pharmacopoeia 11.0 (European Treaty Series No.50)	Council of Europe	Council of Europe	2022年7月
JAPIC 医療用医薬品集 2023 薬剤識別コード一覧	一般財団法人日本医薬情報センター	丸善出版株式会社	2022年8月
医薬品添加物規格 2018追補Ⅱ		株式会社薬事日報社	2022年7月
過敏性肺炎診療指針2022	日本呼吸器学会過敏性肺炎診療指針 2022作成委員会編	一般社団法人 日本呼吸器学会	2022年4月
プラネタリーヘルス 私たちと地球の未来のために	長崎大学 監訳 河野茂 総監修	丸善出版株式会社	2022年3月

## 情報提供一覧

2022年9月1日～9月30日提供

情報提供一覧	発行日等	JAPIC作成の医薬品情報データベース	更新日
〈出版物・CD-ROM等〉		〈iyakuSearch〉 Free	<a href="https://database.japic.or.jp/">https://database.japic.or.jp/</a>
1. 「一般用医薬品 (経済課コード)」 2022年8月分 (HP定期更新情報掲載)	9月 1日	1. 医薬文献情報	月 1 回
2. JAPIC 「医療用医薬品集 2023」	9月 2日	2. 学会演題情報	月 1 回
3. JAPIC 「一般用医薬品集 2023」	9月 5日	3. 医療用医薬品添付文書情報	毎 週
4. 「JAPIC NEWS」 No.461 2022年10月号	9月30日	4. 一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
〈医薬品安全性情報・感染症情報・速報サービス等〉 (郵送、電子メール等で提供)		5. 臨床試験情報	随 時
1. 「JAPIC Pharma Report海外医薬情報速報」	毎 週	6. 日本の新薬	随 時
2. 「医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Qサービス)」	毎 週	7. 学会開催情報	月 2 回
3. 「JAPIC-Q Plusサービス」	月 1 回	8. 医薬品類似名称検索	随 時
4. 「JAPIC-Q 医療機器情報サービス」	月 2 回	9. 効能効果の対応標準病名	月 1 回
5. 「外国政府等の医薬品・医療機器の安全性に関する措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)」	毎 日	〈iyakuSearchPlus〉	<a href="https://database.japic.or.jp/">https://database.japic.or.jp/</a>
6. 「JAPIC Weekly News」	毎 週	1. 医薬文献情報プラス	月 1 回
7. 「感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)」	毎 週	2. 学会演題情報プラス	月 1 回
		3. JAPIC Daily Mail DB	毎 日

### 外部機関から提供しているJAPICデータベース

〈株式会社ジー・サーチJDreamⅢから提供〉 <https://jdream3.com/>

〈株式会社日本経済新聞社から提供〉 <https://telecom.nikkei.co.jp/>

# 医療用 医薬品集 2023



赤ジャピ50年の伝統を守り  
薬剤師を中心とした  
専門のスタッフが丁寧に作成しています。

好評発売中



## 本書の特長

- ◆2022年6月後発品まで収録
- ◆約50年の編集実績による信頼と使いやすさ
- ◆国内流通全医薬品の最新で正確な添付文書情報をお届けします！
- ◆「薬剤識別コード一覧」を収録
- ◆更新情報メールの無料提供（要登録）
- ◆CD-ROM付
- ◆分冊にて製作（ケース入り）

Windows版

## CD-ROM収録内容

- 医療用医薬品集
- 一般用医薬品集
- 薬剤識別コード一覧
- 薬価情報
- 後発品の全情報
- 添加物情報
- 最新添付文書画像(PDF)の表示機能付

要インターネット接続。医療用医薬品は週1回、一般用医薬品は月1回更新

14,300円(税込) B5判 約4,500頁(本文)

一般財団法人 日本医薬情報センター **JAPIC** 編集・発行  
丸善出版株式会社 発売

上記書籍の他、電子カルテやオーダーリングシステムに搭載可能なJAPIC添付文書関連データベース(添付文書データおよび病名データ)の販売も行っております。データの購入希望もしくはお問い合わせはJAPIC (TEL 0120-181-276) まで。



このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。リフレッシュにどうぞ!!

## まるばるこう

「丸葉纒紅」と書く。別名:るこうあさがお。学名:Ipomoea coccinea L. 英名:Red morning glory. ひるがお科さつまいも属。つる性一年生草本。熱帯アメリカ原産。江戸時代に観賞用として導入。本州中部以南の各地に帰化している。開花期は7~10月。鮮やかな朱赤色、花後に種子を付ける。Indole alkaloids 類lysergamide(幻覚活性)等含有。(hy)



JAPICホームページより  
<https://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン

Topページ右下部の「アイコン」からも閲覧できます。